

# 決断を恐れず全力疾走で あるべき大学の姿を探る

ものづくり集積地・中部にあつて、トップレベルの人材育成を支える名古屋大学。同大学は天野浩教授をはじめ計六人のノーベル賞受賞者を輩出するなど、アカデミアとしても存在感を示している。今年四月、第一四代名古屋大学総長に就任した松尾清一氏に、世界を見据えたこれからの大学の在り方について聞いた。

——総長就任の率直なご感想は。

**松尾** 附属病院の病院長や副総長も経験してきましたが、そういった役割とは見える風景、入る情報、そして決定責任の重さが全く違います。覚悟していたのですが、思ったよりも大変ですね。

例えば、名古屋大学の産学連携は多岐にわたっており、複雑な関係性のある中で決定を下すのは難しいことです。だからといって、

先送りすることは組織全体に悪影響を及ぼすため、バランスが大事故だと思っています。

昨年、十月末に総長の最終候補者になったときから、様子見はせず、最初から突っ走る方針を決めておりました。そのため、まずは情報収集が必要と考え、総長就任前に学内外の一〇〇名程度の方の話聞き、これから関わる方々の顔と名前、考え方などを一致させ

ていきました。おかげで四月の正式スタート時には、役員会を含めてガバナンスができている状態でした。

今後とも大学という大組織の運営にあたり、各部署に有能なトップを配置し、現場としっかりコミュニケーションをとりつつ、スピード感をもって役目を全うしたいと思えます。

——国では人文社会科学系学部不要論などが議論されており、大学にとっては厳しい時代です。

**松尾** 来年から始まる第三期中期計画で六年毎の予算が組まれますが、今回、国の大学向け予算は留保の割合が増え、多様な財源確保を促す傾向にあります。我々と

しては効率良くリソースを配分し、資金を得る努力を続けつつ、急な変化に対応できる財務・経営計画を立てていきたいと思えます。

そもそも名古屋大学の人材育成とは、リーダーの育成です。平成十二年制定の学術憲章にも、それは明記されています。ものづくり中心のこの地域は、人文社会科学系が弱いとされていますが、単なる専門知識だけでリーダーシップをとることはできませんし、企業のトップに法学部出身者が多いことから考えても、ここで人文社会科学系廃止に傾けば、幅広い視野を持った優秀な人材は育成できません。

一方で、二〇年来変わらずにき